

「(略) ……ただこれだけは話さなければなりません、あの人はひと月ほど前に僕を呼んで、僕に三千ルーブリの金を渡して、モスクワにいる妹さんともうひとり親類の女の人のところへ送ってくれと頼んだのです（まるで自分の手じゃ送金できないみたいだね!）、ところが僕は……それはちょうど僕の運命が決せられる大事な時で、僕は……まあ、要するに、べつの女が、彼女が、いまの女、ほらいまこの階下にいるでしょう、あのグルーシユンカが好きになったばかりのときで……僕はそのとき彼女をこのモータロエへつれて来て、ここで二日間にそのいまましい三千ルーブリのうちから、つまり千五百ルーブリを使い果たして、あとの半分は手もとに取っておいたわけです。それで、その取っておいた千五百の金をお守りがわりに首にかけて歩いていたんですが、きのう封を切って、遊興費に使ってしまったってわけなんです。いまあなたが手にしているその八百ルーブリののこりの金はね、判事さん、あれはきのうのその千五百ルーブリののこりなんですよ」

「ちょっと待ってください、じゃあれはどうなんです、あなたはそのとき、ひと月前に、ここで使ったのは三千であって、千五百じゃなかったんでしょう、これはだれもが知っていることですよ？」

「だれがそんなことを知っているんです？ だれか数えた者でもいるんですか？ 僕が数えさせた者でもいるんですか？」

「とんでもない、あなたは自分の口からみんなに、あのときちょうど三千ルーブリ使ったと言いつらしていたじゃありませんか」

「そのとおりです、言いふらしましたよ、町じゅうの人に言いふらしました、町じゅうの者がそう言っていました、だれもがそう思っていたし、ここのモータロエの者もみんな、やはり三千だと思っていました。しかしやっぱり僕が使ったのは三千ではなくて千五百だったんですよ、そしてあとの千五百はお守り袋に縫いこんでおいたんです。そんなわけだったんですよ、みなさん、これがあのきのうの金の出どころなんです……」

調書の書名がすんだとき、予審判事はおごそかに被告のほうを向いて、つぎのように書いてある『決定』を読んで聞かせた。何年何月何日、某所において、某地方裁判所予審判事が某（つまりミーチャ）を容疑者としてこれこれについて（罪状はのこらず詳細に書きつらねてあった）尋問したところ、被告は自分に擬せられた犯罪を否認したにもかかわらず、なんら自分の無罪の証明を呈示せず、しかも証人（其々）及び状況（かくかくの）がその罪証を完全に示した事実にかんがみて、『刑法』第何条等に準拠して、つぎのとおり決定した。某（ミーチャ）にたいして審理及び裁判を回避する手段を封ずるため、彼を某監獄に収容し、そのむね被告に通告し、この決定の写しを副検事に渡すものとする云々というのである。要するに、ミーチャは、このときをもって囚人となり、ただちに町へ護送されて、町のあるすこぶる不愉快な場所に監禁されること審 になったことを申しわたされたのである。

書名は、本の印刷通り。

イワンは神を持っていな

い。が、あれは思想を持っている、おれとは桁ちがいな思想を。しかし、あいつは口をつぐんで語らないんだ。おれは、あいつはフリーメーソンじゃないかと思うね。なにを聞いても——黙っているんだものな。

(ミーチャ)

ところが、女の前で自分の罪を認めて、

『わかった、許してくれ、勘弁してくれ』なんて言ってみろ、たちまち小言が雨あられと降りかかってくるから！ けっしてあっさりとは許しちゃくれないから、そしてお前をぼろくそにやっつけ、なにひとつ忘れずにひとつのこらず取りあげて、なかったことまで並べたて、自分のことまでつけ加えて、そうやってはじめて許してくれるくらいのもんだ。しかもそんなのはまだ質(たち)のいいほうなんだぞ、女のなかでも質のいいほうなんだ！ 最後のちっぽけなのこりかすまでひっ搔きだして、なにもかもこっちに罪を着せちまうから——おれはお前に言うておくが、**女にはそういう残忍性がひそんでいるものなんだ**、おれたちが生きていく上になくってはすまないあの天使たちはひとりのこらずそうなんだ！

(ミーチャ)

アリョーンヤ、聞いてくれ、じつ

はイワンがおれに逃亡をすすめているんだ。こまかい話はよしておくが、すっかり手はまわしてあって、万事うまく運ぶことになっているんだ。口をつぐんで、決定を下さないでくれよ。**アメリカへ、グルーシュンカといっしょに逃げろ**って言うんだ。おれはグルーシュンカがいなかったら生きていけないからな！

「私もやはりあのときちょっと、やはり**私のことも当てにしておられるんだ**なとそう思いましたよ」スメルジャコフは嘲るように歯を見せて笑った。「だからこそそんなわけであのときはなお一層私に自分の正体を暴露してしまわれたわけですよ、だって私にたいしてそういう予感がありながらお出かけになったということは、つまり、そうすることでちょうど、**お前は親父を殺した**っていいぞ、僕は邪魔立てはしないからな、とこうおっしゃったもおなじじゃございませんか」

「この野郎！ きさまはそんなふうにとったのか！」

「それもこれも例のチェルマーシニャのせいでございますよ。考えてもごらんなさい！ あなたはモスクワへお立ちになろうとして、おとうさまがいくらチェルマーシニャへ行ってくれと頼まれても、ことわっておしまいになったでしょう！ だというのに私のようなばかかひと言いただけでたちまち同意なすったじゃありませんか！ あなたにはあのときなんのためにあのチェルマーシニャ行きに同意する必要があたりだったんですかね？ なんの理由もないのに、私のひと言でモスクワ行きをやめてチェルマーシニャへお出かけになったとすれば、これはつまり、私になにか**期待していら**っしゃったということになるでしょう」

(スメルジャコーフ)

「(略) それとも、私に面とむかって、その上なにもかも私だけに罪を着せようってんですかね？ **殺したのはあなたですよ、あなたが主犯ですよ、私はただあなたの手先**で、忠僕リシャール (フランスの騎士物語にもとづく『ポーワ王子』に出てくる忠僕) にすぎず、私はお言葉どおりにあれを遂行したにすぎないんですからね」

「遂行した？ じゃ、お前が殺したのか？」イワンはぞうっとした。

(スメルジャコーフ)

「まちがいなく望んでおられましたよ、だからこそ同意することによってあのとき暗黙のうちにあの仕事をやってもいいとお許しになったわけじゃありませんか」スメルジャコーフはこう言ってイワンをしっかりと見すえた。彼は体こそ非常に衰弱して、口のきき方も静かで疲れているようではあったが、心の奥ふかく秘めたなものかにあおられており、明らかに、なにか魂胆があるらしく見えた。イワンはそう予感していた。

「でそのさきはどうなんだ」とイワンは相手にむかって言った。「その晩の話をつづける」

「そのさきは話すほどのこともございません！ 私が寝ておりますと、旦那がなにか叫んだような気がしました。グリゴリーじいさんはその前に急に起きだして、出ていきましたが、だしぬけに喚き声がしたかと思うと、あとはまったくひっそりとして、真の闇です。私は横になって、心臓をどきどきさせながら待っていたんですが、もうどうにも我慢ができなくなりました。そこでとうとう起きあがって、外へ出て、——見ますと、左手の、旦那の部屋の、庭に面した窓がぁっているじゃありませんか、で私はさらに左手へ足をはこんで、旦那が生きて部屋にいるかどうかと耳をすましてみますと、旦那が身もだえしたり嘆息をもらしたりしているのが聞こえます。するとつまり生きてるってことだ、ちえっ、と私は思いました！ 窓のそばへ行って、『私ですよ』と旦那に声をかけると、旦那は『あいつが来たんだ、来たんだ、逃げていっちゃいやがったんだ！』とおっしゃる。つまり、ドミートリイさんが来たということなんですよ。『グリゴリーを殺しやがった』『どこで？』と私が小声で聞きますと、『あそこの隅だ』と旦那は指さして、やはり小声で答えるのです。『ちょっと待ってください』と私は言いおいて、その隅へさがしに出かけますと、塀のそばに、グリゴリーじいさんが見つかりましたが、じいさんは血だらけになって、気を失って倒れているじゃありませんか。してみると、ドミートリイさんが来たということはまちがいない、という考えがとっさに頭にうかび、そのとたんに**その場でひとつひと思いに片づけてしまおうと決意**したのです、というのは、グリゴリーじいさんは、たとえまだ生きていたにしたところで、気絶して倒れているのだから、いまのところはなんにも見やしないだろうとこう思ったからです。が、ひとつだけ心配なことがありました、それはマルファばあさんが急に目をさましやしないかということです。私はそのときそう感じたのですが、そのときはもうやつけたいという気持ちでいっぱい、息もつまりそうでした。で、また旦那の部屋の窓の下へ来て、こう言いました。『あの方がここに采ていらっしゃいます、いらっしゃったのです、アグラフェーナさんがいらっしゃって、なかへ入れてくれとおっしゃってます』すると、旦那はまるで子供みたいにぶるっと身ぶるいして、『ここってどこだ？ どこなんだ？』としきりにうめくように言うのですが、まだ信じられない様子なのです。『あそこに立っていらっしゃいますよ、あけてやってください！』と私が言うと、窓ごしに私のほうを見ているのですが、半信半疑で、恐がって、あけないのです。これはおれを恐がっているんだなと私は思いました。と

ころがおかしいじゃありませんか。そのとき私はふと、窓枠をノックして、グルーシュンカさんが来ましたよという合い図をしてやろうと思いついたんで、それを旦那のしている前でやったんですが、旦那は私の言うことは信じられないらしいのに、私が合い図のノックをすると、さっそくドアをあけに駆けだしてきたじゃありませんか。そしてあけてくれたんですが、私がなかへはいろいろとすると、旦那は私の前に立ちふさがって、まったく入れようとせず、『あれはどこにいるんだ、あれはどこにいるのだ？』と聞きながら、私の顔を見て、ぶるぶるふるえているのです。こんなにおれを恐がっているようじゃ、うまくいかないぞと私は思いました。そして、旦那はおれを部屋のなかへ入れてくれずに、叫んだり、マルファバあさんが駆けつけたり、そのほかなにか起きたりしたら大変だぞと思ったとたんに、おそろしさに私は自分の足から急に力がぬけてしまいました。私はそのときはおぼえがありませんが、旦那の前に青い顔をして突っ立っていたに相違ありません。『そこですよ、その窓の下にいるじゃありませんか、どうして旦那さんには見えないんでしょう？』と私は耳打ちしました。『じゃお前、つれてきてくれないか、お前、つれてきてくれ！』『でもあの人には恐がっているんですよ、大きな声にびっくりしてしまって、茂みのなかに隠れてしまったんです、ひとつ行って、ご自分で書斎の窓から呼んでごらんないまし』と私は言いました。すると旦那は窓のそばへ駆け寄って、ろうそくを窓の上において、『グルーシュンカ、グルーシュンカ、お前は来ているのかい？』と声をかけました。本人はそう声をかけながらも、体をかがめて窓のそとを見ようとはしないんです。私のそばを離れたがらないんですよ、例の恐怖心からなんです、私がひどく恐くて、それで私から離れようとしなわけなんです。『ほら、あそこにいますよ（こう私が言うと、旦那は窓のそばへ行って、体をすっかりそとへ突きだしました）、ほら、あそこの茂みのなかにいて、旦那さんを見て笑っているじゃありませんか、ほら、見えるでしょう？』旦那さんは急に私の言うことを真に受けて、たちまちぶるぶるふるえだしました、グルーシュンカさんには大変な惚れこみようでしたからね、で旦那は体をすっかり窓のそとへ乗りだしました。私はそのとき、例の鉄の文鎮を、ほらおぼえていらっしやるでしょう、旦那の机の上にあった、**重さが一キロもあろうというあれですよ、あれをつかんで振りあげざま、旦那のうしろから脳天目がけてその角で打ちすえたのです。**旦那は叫び声ひとつたてずに、ただへたへたとくずおれてしまいましたので、私は二回、三回と、なぐりつけました。三回めのときに、頭蓋骨が割れたような手応えがありました。旦那はぼったりあお向けに、顔を上にして、全身血みどろになって倒れました。私は自分の体を調べてみますと、返り血ひとつあびていないので、文鎮をよくふいて、机の上におくと、聖像のかげへまわって、封筒のなかから金をとりだし、封筒を床に投げすてて、それに例のバラ色のリボンもそばにほうりだしておきました。それから庭へおり立ったのですが、体じゅうがたがたふるえています。そしてまっすぐに洞(ほら)のあるりんごの木のところへ行きました——あなたはあの洞をご存じでしょう、私はもうとっくからあの洞に目をつけて、すでにそのなかにぼろや紙きれを入れておいたんですが、これはだいぶ前から用意しておいたものなのです。私は金をぜんぶその紙でつつみ、それからぼろきれにくるんで、奥ふかくおしこみました。**そんなわけであれはあそこに二週間の余もおいてあったんですよ、この金は。**そしてその後退院してから取りだしてきたわけです。私は自分の寝床へ引返して、横になって、恐怖におののきながらこう考えました。『これがもしグリゴリーじいさんが完全に殺されているとなると、そのためにひどくまずいことになるが、殺されずに意識をとりもどせば、すこぶる好都合なことになる、そうなればあのじいさんは、ドミートリイさんが押し入ったということの証人になってくれる、つまり**殺したのも金を持って逃げたのもドミートリイさんだということになるわけだから**』そこで私は疑惑と焦躁にかられて呻きはじめたわけですが、これはなるべくはやくマルファバあさんを起こそうとしたのです。ばあ

さんはとうとう起きだして、私のところへ駆けつけそうにしましたが、ふと、グリゴリーイじいさんがいないのに気づくと、そとへ駆けだしました、そして庭のほうできゃあっと叫んだのが聞こえました。さあ、それから例の騒ぎが持ちあがって、ひと晩じゅうつづいたわけですが、私はもうこれで万事安心といった気持ちでした」

語り手はここで話をやめた。イワンはそのあいだずうっと、死んだように黙りこくったまま、身動きもしなければ相手から目もはなさずに、相手の話を聞いていた。

私は医者ではないが、それにしてもぜひともイワンの病気の性質についてせめてなにか読者に説明しなければならぬときが来たような気がする。先まわりしてひとつだけ言っておこう。彼はいま、この夜、**酒客譫妄**が発病を見る一歩手前まで来ていたのであって、もうだいぶ前から破壊されてはいたが病気に頑強に抵抗していた体の組織がついにもはやすっかりこの病気に征服されてしまっていたのである。

~~~~~

酒客譫妄 しゅかくせんもう

酒客： 酒飲み。酒ずき。上戸（じょうご）

譫妄： 意識混濁に加えて奇妙で脅迫的な思考や幻覚や錯覚が見られるような状態。健康な人でも寝ている人を強引に起こすと同じ症状を起こす。特に ICU や CCU で管理されている患者によく起こる。

~~~~~

（イワンと対話していた幻のジェントルマン）

「(略) それに連中の常套的なやり方だ

が、**すぐに専門家のほうへまわしちまうんだ**。ここでは診察だけはやってあげるが、これこれの専門医のところへいらっしゃい、あそこなら治療してくれますよなんて言ってな。僕は断言するけど、昔いたような、どんな病気でもなおしてくれる医者なんて、まったく地を払ってしまって、いまじゃ**専門医しかいないね**、そしてみんな新聞広告ばかりしていやがるんだ。ま、かりに鼻の病気にでもなごらん、パリへやられるから。あそこならヨーロッパ的な専門医が鼻をなおしてくれるっていうんでね。そこでパリへ行ってみると、専門医は鼻を診て、**私に治療できるのは右の鼻の穴だけで、左の穴は治療できません、それは私の専門外**ですから、だからこのあとウィーンへいらっしゃい、あそこの特別な専門医が左の鼻孔をなおしてくれるはずです、とこうくるんだ。(略)」

「(略) 親父を殺したのは僕です、下男は僕の使噓で親父を殺したんです、(略)」

~~~~~

使噓(しそう) さしずして、そそのかすこと。けしかけ。

~~~~~

私が叙述したいろんな事件のあったその翌日の午前十時に、当地の地方裁判所が開廷されて、ドミートリイ・カラマーゾフの公判が開始された。

前もって念をおしておくが、私は到底自分には、法廷で起こったことをのこらずお伝えすることは、それもかなり完全にどころか、かなり順序立ててさえお伝えする力はないものと思っている。私にはどうも、もしものこらず思いおこして、のこらずしかるべく解説するとなれば、一冊の本、しかもすこぶる大部の本さえ必要とするように思われるのである。だから、私個人がふかい感銘をおぼえ、私がとくに記憶していることしかお伝えしないからといって、**私に苦情を言わないでいただきたい**。私は第二義的なものをいちばん肝心なものと思いちがいしたり、はてはいちばんはっきりした必要欠くべからざる線をすっかり描きおとしてしまったりするかもしれない……しかし、こんな言いわけはしないほうがよいようにも思う。できるだけのことをやってみよう、そうすれば読者諸君も、私ができるだけのことをしたことを理解してくださるだろうから。

カテリーナの恋仇であるグルーシュンカの出廷も、それに劣らぬ興奮をおぼえながら待たれていた。これらふたりの恋仇——傲慢な貴族の令嬢と『高級淫売婦』との法廷での出あいにはなやましいほどの興奮をおぼえながら待ち受けられていたのである。それでも、グルーシュンカのほうがカテリーナよりも、町の婦人たちのあいだにはよく知られていた。町の婦人たちは『フォードルとその不幸な息子の一生を台なしにした女』である彼女を前にもたびたび見ていただけに、ひとりのこらずだれもが、こんな『ごくありふれたまったく美人でもないロシヤふうの町娘』に親子がよくもこれほど惚れこんだものだと不思議がっていた。

裁判長は体のがっしりしている、ずんぐりした、中背よりもひくい、**痔持ちのような顔**をした、年は五十がらみの、短く刈りこんだ黒っぽい髪に白髪のまじった男

~~~~~

大様（おおよう）

「鷹揚」とも書くが、元来は別語》落ち着きがあって、小さなことにこせこせしないさま。

~~~~~

（副検事イッポリート）

この事件を叙述することを思い立った才能ある青年——やはり、さきほど申しあげた例のラキーチン氏ですが、——この人は簡にして要を得た数行の言葉でこの女主人公の性格をこう定義しております。『男に誘惑甘されて捨てられたためにあまりにもはやく幻滅と欺瞞と墮落を知り、ついで貧窮と清潔な家庭からの呪詛をあじわい、あげくのはてにいまでも自分の恩人と見ているある金持ちの老人の世話を受ける身となった。彼女のわかい心はおそらく多分に善良なものも秘めていたのであるが、あまりにもはやくから怒りを蔵するようになったのである。そして、金を貯めこむ打算的な性格がつくられ、社会にたいする冷笑癖と復讐心が形づくられたのであった』というのであります。こうした性格描写を読めば、彼女が当然たわむれに、**意地悪なたわむれの気持ちからふたりをからかったのだ**ということがわかるのであります。こうしてこのひ

と月間被告は、希望のない恋と道徳的墮落と自分のいいなずけにたいする裏切りと自分に託された他人の金の横領などに苦しみながら、その上絶え間ない嫉妬に逆上し気も狂わんばかりになっていたわけでありましたが、それもだれにたいする嫉妬かといえば父親にたいする嫉妬であったわけです！

(弁護士フェチュコーヴィッチ)

「(略) 息子を自分の父

親の前に立たせて、筋道立てて父親にこう質問させるのです。『おとうさん、なんのために僕はおとうさんを愛さなければならないのか、僕に教えてください。おとうさん、どうして僕はおとうさんを愛さなければならないのか、僕に証明してみてください！』と——でもしその父親が息子の質問に答えて証明できたとすれば、——これこそほんとうの正常な家庭であって、神秘的な偏見だけによって築かれているのではなくて、合理的な、自明の、きびしく人道的な基礎の上に打ちたてられた家庭ということになります。その反対の場合、つまり**父親がそれを証明できなかった場合には——たちまちその家庭はおしまい**ということになります。父親は息子にとって父親ではなくなり、息子は自由を手に入れ、以後自分の父親を自分には他人であると見、敵であるとさえ見なす権利を獲得することになります。陪審員のみなさん、われわれの演壇は真理と健全な考えの学校とならなければなりません！」

フォードル 妻アデライーデ、2 番目妻ソフィア

長男(先妻) ミーチャ(ドミートリイ) ドミートリー・フォートロヴィッチ・カラマーズフ

次男(後妻) イワン(ワーニャ)

3 男(後妻) アレクセイ(アリョーシヤ) アレクセイ・フォートロヴィッチ・カラマーズフ

下男 グリゴーリイ(夫)

マルファ(妻)

養子 スメルジャーコフ リザヴェータ・スマルジャーシチャヤ

ラキーチン(ミーシヤ) ミハイル …実はグルーシェンカのいとこ

中佐の後妻の次女 カテリーナ

長女 アガーフィヤ(カーチェンカ)(カーチャ)

グルーシェンカ(アグラフェーナ) 苗字スヴェートロワ

ホフラーコワ夫人

娘 リーザ

ゾシマ長老 セラフィックス神父

ペルポーチン ピストル担保に金貸し